

# Zoom Up

# 人

何かを我慢して  
牛と向き合っているわけじゃない  
好きだから酪農をしているだけ



## 畠山 満理奈 さん

●はたけやま・まりな 今年の春から酪農家としてスタートを切った21歳。県立盛岡農業高校畜産コース、県立農業大学校酪農経営科と酪農一筋の学生生活を送る。趣味は釣りなどのアウトドア。「人見知りな性格のため引っ込み思案に見られがちだが、芯はしっかりしている」と自己分析する。「何事も一生懸命に、あきらめずにがんばること」をモットーとする。血液型B型のおうし座。大更在住。



### 小

さいころから生活の一部に牛がいて、ごく自然に牛の世話を手伝うようになっていた。小学生になると、共進会に出品した牛の手綱を引くハンドラーも務めた。牛のことならどんなことも苦にはならなかつたという。それが、21歳という若さで酪農家としての道を歩き出した満理奈さんの原点だ。

牛に情熱を注ぐ祖父や父の背中を見ているうちに、いつの間にか酪農家を志すようになり、他の仕事をしようとは思わなかつたという。酪農のために高校を選び、さらに専門的に学ぶため農業大学校に進んだ。学生時代はまさに「一途」。酪農のためと、同級生の誰よりも早く大型特殊やけん引の免許を取得した。卒業研究も学科を代表して全校発表するほどの完成度で、

ひたむきな姿勢が彼女の酪農への思い入れの強さを物語っている。

学生時代の友人は一度社会人を経験してから就農しようとする人が多く、同じ世代の酪農家はほとんどいない。寂しさがなければいけないが、酪農家の大先輩であり、一番の目標である祖父や父がいつもそばにいる。酪農を学ぶのにこれ以上に良い環境はない。毎日が勉強の連続だ。学校で学んだことだけで通用するほど甘い世界ではなかつた。「免許は持っていて、まだまだ足手まとい」という農業機械の操作も、日に日に板についてきた。

酪農家としての今の目標は、5年に1度開催される全日本ホルスタイン共進会に自分の育てた牛を出品し、入賞させること。そこでは、頑張った分だけ評価される。頑張りが認められる、これこそが酪農家の最大の喜びであり、魅力でもあるのだという。「牛と触れ合っている時間が一番幸せ」と笑顔で語る満理奈さんの言葉からは、牛への愛情の深さが感じられる。牛へのあふれる愛情と情熱を抱き、今日も牛との触れ合いに笑顔を輝かせている。